

2024 すいせん図書

～本の森へ～

小学生



西東京市図書館



リストにのっている本は
貸出・予約することができます

1・2年生

「トットちゃんの15つぶのだいず」 黒柳徹子 原案 柏葉幸子 文 松本春野 絵／講談社

トットちゃんが小学2年生のとき、日本は戦争をはじめました。戦争が始まると、食べるものがなくなっていき、一日ぶんの食べものは、とうとう15つぶのだいずだけになってしまいました。その上、夜までなんつぶか残るように、よく考えて食べなければいけません。今の平和なくらしを大切にしようとおもうことができるお話です。



「ネコになりたかったクモのルイージ」 ミシェル・ヌードセン さく ケビン・ホークス え 福本友美子 やく／岩崎書店

けがもじゃもじゃのおおきなクモが、すむところをさがしてたどりついたのは、ベティというおばさんのすむふるいいえ。そこでおばさんにみつかり、ルイージとなづけられたクモは、子ネコとしておばさんといっしょにくらします。

クモがネコになる？ルイージのすがたに、こころあたたまるとおはなしです。



「なかよくなれるかな」

今井福子 作 いつか 絵／文研出版

小学校のしよくごやにいるウサギのチュロにあいたい一年生のれな。でも、いつもおこったり、どなったりしてる、しよくがかりの六年生のおにいさんがいるので、こわくていけません。ともだちのたけちゃんはおのおにいさんとなかよしで、こわくないし、やさしいといひます。れながおにいさんのやさしいところにきづくお話。



「それで、いい！」

磯みゆき 作 はたこうしろう 絵／ポプラ社

きつねは、えをかくのがだいすき。てんらんかいにだすために、すごいえをかこうとしますが、みんなにどうおもわれるかばかりしんぱいになり、かくのがたのしくなくなります。とうとうかけなくなってしまったきつねに、ともだちのうさぎは「きつねちゃんのえ、だいすき。」といひました。たからものみいたいな気持ちをみつけた二人のお話。



「こんにちは、アンリくん」 エディット・ヴァシロン 文 ヴァージニア・カール 文・絵 松井るり子 訳／徳間書店

アンリくんは、フランスにすんでいてかぞくがおおぜいひます。ねこのミシェルくんも、フランスにすんでいてかぞくがおおぜいひます。あるひ、ふたりともかあさんから「さかなをかってきてちょうだいな」といひれます。ふたりがえらんだのはなんとおなじさかな！ふたりとかぞくのたのしい3つのおはなしです。



「図書館のぬいぐるみかします1 わたしのいるところ」

シンシア・ロード 作 田中奈津子 訳 ステファニー・グラエギン 絵／ポプラ社

黒いおさががみのアイビーは、アンのおにんぎょうです。ある日、アイビーは、アンのはたらいている図書館につれてこられ、＜ブック・フレンド＞として、ファーンという女の子にかしだされることになりました。

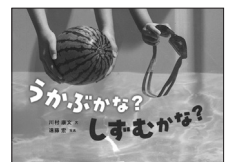
ぬいぐるみをかりられる図書館での楽しいお話です。



「うかぶかな？しずむかな？」

川村康文 文 遠藤宏 写真／岩崎書店

おみずのなかにボールやミニカーをいれてみよう。うかぶかな？しずむかな？ボールはうかんで、ミニカーはしずんだ。ボールをおみずのなかにぐいっとしずめても、またうかんできた。ねんどはどうかな？やさいならどうかな？あれこれじっけんしてみよう！おもわずためしてみたくなる、かがくのえほんです。



「ワレワレはアマガエル」

松橋利光 文・写真／アリス館

みんなは「カエル」って聞くと、どんなカエルを思ひうかべる？ジャンプがとくいで、きみどり色で、目がピョコンと出てて、口が大きくて、つるつるのかべをのぼれて、スイスイおよげて。そう、カエルといひば…ワレワレアマガエル！

アマガエルについていろいろわかって、「会ひに行きたい！」と思ひ写真絵本です。



3・4年生

「赤いボタン」

岡本央 写真・文／大月書店

長崎市にある爆心地公園をつくり直す工事が始まったとき、地面からは台所道具やおとなの背骨、小さな頭の骨などのほかに赤いボタンが出てきました。1945年8月9日午前11時2分、現在の爆心地公園の上空約500メートルで原爆が爆発する前、ここにはたくさんの人々の命があったのです。原爆でなくなった人たちの遺品は大切な語り部です。戦争や原爆のおそろしさがつたわる写真絵本です。



「心をひらいて、音をかんじてー耳のきこえない打楽器奏者エヴェリン・グレニーー」

シャノン・ストッカー 文 デヴォン・ホルズワース 絵 中野怜奈 訳／光村教育図書

丘の上の農場で育ったエヴェリンは音楽がだいすき。ところが、しだいに耳に痛みをかんじるようになり、お医者さんから耳がきこえなくなるといわれます。中学校で打楽器に出会ったエヴェリンは、「わたしがやりたいのは、これだ!」と思い、レッスンをうけることにしました。エヴェリンは、体じゅうで音をかんじることができました。強い意志をもって夢をかなえた打楽器奏者、エヴェリン・グレニーの物語。



「海にしずんだクジラ」

メリッサ・スチュワート 文 ロブ・タンラヴィ 絵 千葉茂樹 訳 藤原義弘 日本語版監修／BL出版
いっとうのクジラが死んだ。その大きなからだは、しずかに、ゆっくりしずんでいき、まっくらなやみをとおりぬけ、海の底によこたわった。70年生きてきたクジラの命は、これでおわり。でも、深海でひっそりくらす生きものたちにとっては、あらたなはじめ。これから50年にもわたり、何百種類もの生きものの命をささえつづけるのだ。深海の生きものの、命のじゅんかんを学ぶことができる絵本。



「犬がすきなぼくとおじさんとシロ」

山本悦子 作 しんやゆう子 絵／岩崎書店

小学4年生の海斗は、犬が大好き。家で犬を飼いたい、母さんにいやな顔をされ、飼うことができないでいた。三学期がはじまってすぐのある日、海斗は川ぞいの土手の下で1匹の犬を見つける。それは、ホームレスの飼っているシロという名の犬だった。ホームレスのおじさんとシロ、海斗のきずながすてきなお話です。



「100年見つめてきました」

吉野万理子 作 川上和生 絵／講談社

わたしの名前は「飛行塔」。奈良県生駒山のとっぺんにある遊園地の乗りものです。100年前に造られてからこれまで、楽しいことや悲しいこと、うれしいことを、この山の上からずっと見てきました。これから、その100年のできごとをお話したいと思います。本当にある遊園地の乗りものの視点で、日本の戦争を見つめる物語。



「おもちゃ屋のねこ」

リンダ・ニューベリー 作 田中薫子 訳 くらはしれい 絵／徳間書店

テオおじさんは、おもちゃ屋さんです。ある日、ハティがおもちゃ屋さんに行くと、ショーウィンドウの中で1匹のねこがまるくなって、すやすやとねむっていました。さいしよは新しいおもちゃかなと思いましたが、ぐーんとおびをして開いた目はあざやかな明るい緑色でした。お店では、ねこが来た日からふしぎなことが起こります。心あたまるお話です。



「本おじさんのまちかど図書館」

ウマ・クリシュナズワミー 作 長友恵子 訳 川原瑞丸 絵／フレーベル館

インドの小学校に通うヤズミンの楽しみは、学校の帰りに「まちかど図書館」へより道すること。本おじさんが「ぴったりの日に、ぴったりの人に、ぴったりの本を」選んでくれるので、すでに400冊も本を読んでいます。ところが、誰かが市に苦情の手紙を書いたので、図書館は閉まってしまいました。

「まちかど図書館」をとりもどすためにがんばる女の子のお話。



「給食にでてくる魚と肉の切り身図鑑」

こどもくらぶ 編／あすなる書房

みなさんは、ふだん給食で食べている魚や肉が、生きていたものだと思ったことがありますか？そして、スーパーで売られている切り身の魚や肉は、もともとどんな形をしていたのか、知っていますか？

この本では、魚や肉のふいや産地、とくちょうなどを、切り身のじょうたいで知ることができます。各地方の給食に出てくる切り身のメニューものっています。

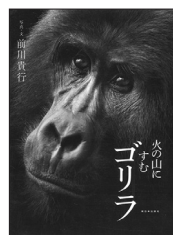


5・6年生

「火の山にすむゴリラ」

前川貴行 写真・文／新日本出版社

ジャングルに暮らす野生のゴリラを見てみたい。どんな性格で、どんな暮らしをしているのか知りたくて、ぼくはアフリカへ向かった。初めて出会ったオスのマウンテンゴリラは、山のような肉体で、威圧感がとてつもない。しかし、粗雑で凶暴に見える彼らの素顔は、想像とはちがうものだった。力強くもあたたかい、ゴリラの魅力を知ることができる写真絵本です。



「アゲイン」

あんずゆき 作 丹下京子 絵／フレーベル館

アオイは5年生。なかよしのサツキに「アオイっていつも人まかせだよ」と言われて気まづくなってしまった。そこで、転校生の八神さんに声をかけたら、いっしょに「子ども食堂」に行くことになった。「子ども食堂」には、親が遅く帰ってくるのでひとりぼっちの子ども、生活に困っている人などいろいろな人がご飯を食べに来る。「子ども食堂」について知ることができる本です。



「かげふみ」

朽木祥 作 網中いつる 絵／光村図書出版

5年生の拓海は、夏休みにおばあちゃんの住む広島に一人で来た。雨の日、おばあちゃんの家の近くにある児童館に行ってみたら、その中の図書室の一番奥の机で三つ編みの女の子が本を読んでいた。何回かその子に会って話すようになり、女の子のさがしている「影の話」を見つけてあげようとする。もう一つ「たずねびと」というお話も入っています。



「あした、また学校で」

工藤純子 著／講談社

六年生の一将は、弟の将人が大縄跳び大会の練習に参加しなかったことで、先生に怒られていたことを聞いた。将人は、大縄跳びのメンバーからも「負けるから出るな」と言われ、次の日から学校を休むようになった。一将は、この事件をきっかけに「学校はだれのものなのか」について考え始める。『学校』という自分たちの居場所について、登場人物それぞれの気持ちがあがっている物語です。



「パフィン島の灯台守」

マイケル・モーバーゴ 作 佐藤見果夢 やく ベンジー・デイヴィス 絵／評論社

ある大嵐の夜のこと。5歳の少年アランの乗る船は、事故にあいました。アラン、そして乗客全員の命を救ったのは、パフィン島の灯台守、ベン。アランはそれっきりパフィン島に行くことはありませんでしたが、彼に助けてもらったことをずっとわすれませんでした。そして学校を卒業したアランは、ベンに会いに行くことを決心します。再会したベンとアランが家族のようにきずなを深めていくお話です。



「アナグマの森へ」

アンソニー・マゴワーン 作 野口絵美 訳／徳間書店

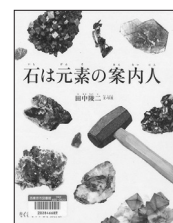
ニッキーは、現在保釈中の父さんと、知的障害のある一歳年上の兄、ケニーの三人暮らし。兄ケニーの面倒は、ほとんどニッキーが見ていて、厳しい生活を送っていた。ある朝早くケニーに起こされたニッキーは、村の不良三人が野生のアナグマと犬を戦わせるという場面に立ち会うこととなる。戦いの後、ニッキーは巣穴に残されたアナグマの赤ん坊を見つけ、連れ帰った。自然の中でたくましく生きる家族のお話です。



「石は元素の案内人」

田中陵二 文・写真／福音館書店

あなたの目にうつるこの世界のすべてのものが、たった90種類の「元素」の組み合わせでできているときいたら、不思議に思いませんか。そのヒントをにぎっているのが石です。鉱物にはその種類によってきまった結晶の形があります。目には見えない小さなつぶの正確な並びが、美しい結晶の形として現れているからです。この石の特徴で、小さなつぶ「元素」の世界がわかる科学絵本です。



「虫のからだ 1 はね」

新開孝 写真・文／岩崎書店

ほとんどの昆虫のからだにある4まいのはね。はねは、空をとぶためだけでなく、いろいろな使いかたがあります。モンシロチョウは、はねでオスとメスを見分け、オオカマキリは、はねを広げて相手をおどします。シオカラトンボ、カブトムシ、ショウリョウバッタなど身近な昆虫を中心に、種類によってちがうはねのしくみやはたらきを、あざやかな写真とともに紹介します。『虫のからだ』シリーズは全5巻です。

